

人種の坩堝^{くわくわ}パリ。この街の包容力あつてか、一外国人としての意識をなくすのに時間はかからなかった。そんな解放感の中で出合った展覧会などを。

会場にたった1点だけのセルジュ・ポリアコフ展。大きい横長の絵を展示し続ける画廊に、この国の美術に対する底力を思う。ホルスト・ヤンセン展では、連^つの実を描いた版画に、手彩色を施した作品を購入した。

ルーブル美術館には思わぬことが待ち受けていた。隅々まで執拗^{しつちやう}に描き込んだ人間蠢^蠢く大作の連続に絶えられず、足早に回り2時間ほどで逃げ出したのだ。もっと古代のものを見たかったが、残念ながら閉じられていて叶わなかった。

今はオルセー美術館に移っているが、旧印象派美術

館にも行った。ポンピドゥーセンターに通い、印象派以後の作品に触れていたせいか、光の色彩を表現した絵にしては、くすんで見えた。日本で折に触れて見た印象と落差があり、今もって合点がゆかない。

ボブ・ディランのコンサート^ののポスターを見付け、郊外にあるサッカー場に向

パリ追想1981 II

かった。自分でもギターやピアノを弾きながらディランの曲を歌っていたのだ。「パリで？」と少し違和感

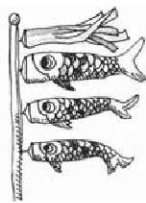
もあつたが、思えば世界各地に離散したユダヤ人の血を引く者。どこにいようと

彼の立つ場所に吟遊詩人ディランの存在があるということか。巨大な音響装置から流れる音の波に、興奮と

感概を持ってからだごと埋没した。風貌までがパリに合つて見えてくる。

フランスは大統領が社会党のミッテランに変わったところで、田中スナオさんは自由の締め付けを恐れ憚^{たは}然としていた。人種や国籍を問わず、画家に対して寛

容なお国柄が崩れるのではないかと。宗教の違いや多人種を抱え、往古から続くヨーロッパの地における緊張の連鎖も併せ持つ人々は、身に降りかかるものに敏感に反応し、無視せず、臆せず、自ら



の立ち位置を示そうとしているように見えた。カフェで会話する人たちは、不要な愛想笑いなどせず意志的^的で世の中をからかわず、政治のことにしろ何にしろ真剣な面持ちで語り合っていた。

僕が滞在中に接した日本人。パリを描き続ける老画家。料理人や絵本作家。フランス人と結婚して花屋を営む男性。スウェーデン人と同棲中の女性。何をやってるのか？有名大^大から屋の息子。彼ら、彼女たちもまた、この地になじみながらそんな性格や慣習を取り込んでいた。

あの時代、日本を出てパリに暮らした人たち。個としても日本人としてもそれぞれに問題を抱え、表に出さずとも、鬨^{はな}い煩悶^{はんもん}する姿を垣間見るようであった。

(吉田 淳治・画家)